

2003年

ダイジェスト版

中国駐在員 活動報告

フレンズ国際労働キャンプ(FIWC)関東委員会

原田僚太郎

FIWC関東委員会中国ワークキャンプ現地駐在員



活動場所:中国広東省潮州市リンホウ村(ハンセン病快復村)を中心とした中国南部

活動期間:2003年4月~2004年3月

活動内容:ワークキャンプのコーディネート、現地大学での学生団体設立など

これまでを振り返って

◎人と人とのツナガリがもたらすもの

私は今、リンホウ村に住んでいる。

1960年代、ハンセン病を病んだ人々がリンホウという名の「麻風村」^(注)に隔離された。

「あそこは怖い『麻風病人』の村だから、近づいちゃダメよ」。

そんな声が、リンホウの人々を40年以上に渡って家族から引き離してきた。その間、村の家屋は老朽化し、自らは年老いた。

私のお隣さんは、「麻風病人」ではない。蔡玩卿という純粋で、優しい、頑固なおばあちゃんだ。彼女の病気は治っている。ここの人たちはみんな「麻風病人」ではない。「リンホウ村の村人」だ。

多くの人々はハンセン病を誤解している。彼らにとってリンホウ村は「麻風村」であり、村人は「麻風病人」でしかない。

「それなら、リンホウに人の流れをつくろう」。

ワークキャンプで人々がリンホウを訪れば、村人と知り合う。ハンセン病を理解する機会を持つ。そして、訪れた人々と村人の間にツナガリが生まれる。そのツナガリは、その人をまた村に呼びよせる。次第に、リンホウ村から『麻風村』のイメージが薄れ、普通の村になる。そのとき、リンホウの人々は家族とのツナガリを取り戻すかもしれない。



(注)「麻風村」…「麻風病」とは、中国語でハンセン病のことを指す。「ハンセン」を音訳した「漢森病」(han sen bing)という言葉もあるが、認知度は低い。「麻風村」は「ハンセン病村」、「麻風病人」は「ハンセン病患者」を指す。



◎リンホウ村駐在とネットワーク＝プロジェクト

2003年4月、私はリンホウ村で暮らし始めた。以来、潮州市の学生を村に呼び、8月には村でのワークキャンプに参加してもらった。10月には、リンホウと深く関わる学生団体を設立した。学生がリンホウ村に来ることは、特別なことではなくなった。

*

リンホウのような、「ハンセン病快復村」と呼ばれる村は中国全土に600以上あると言われる。1つの村に対して1つの学生団体をつくりたい。すべての村の村人と学生がつながって、村人と家族をつなげてほしい。

そんな想いが私を猪突盲進させる。2003年、広東省清遠市、呉川市、広西チワン族自治区桂林市、雲南省昆明市にある村を訪れた。ワークキャンプの準備をし、各市の大学を訪れ、現地の学生をキャンプに巻き込んでいった。2003年11月には、ワークキャンプ団体を広州の学生と共に設立した。2004年春には雲南省以外の上記の村で、4つキャンプをコーディネートした。

この4ヶ所に加え、早稲田大学と韓国の団体が中国のハンセン病快復村でキャンプを行っている。ふと気づくと、因縁の3ヶ国—中国、韓国、日本がつながり始めていた。中国のハンセン病快復村に関わる3ヶ国の団体の間に、横のツナガリをつくりたい。それが、ネットワーク＝プロジェクトだ。

広東省潮州市
韓山師範学院「愛心小組」設立

2003年10月、師範学院に「愛心小組」を設立した。彼らは月例活動をリンホウで行っている。11月には「リンホウ村緊急医療基金」を設立し、村人の医療を保障した。マスコミは私たちを取り上げ、その影響でいくつかの民間団体がリンホウを訪れ、日用品などを寄付した。

これまでの私たちの取り組みは、リンホウの人々の「ハンセン病観」を変えたようだ。2004年2月、村人は潮州市内観光計画に同意した。村人は数十年ぶりに潮州の街を見た。



潮州の学生

11月ワークキャンプに参加した愛心小組とFIWC 関東のキャンパーは村人と食事をするパーティーを開いた

広東省呉川市
トゥーグワン村と湛江師範学院

2003年11月、トゥーグワン村での新キャンプ（FIWC 関東主催）立ち上げは、「朋友工作營」のメンバーと、ひよんなことで知り合った湛江師範学院の学生とで始めた。2004年2月のキャンプ後も湛江師範学院の学生は村と関わりつづけている。5月にはミニキャンプを予定している。



呉川の学生

左前から湛江師範学院のユエユエ、シーピン。左後からFIWC 関東委員会吉田亮輔、朋友工作營ドンビン。ドンビンはキャンプに来れなかったが、下見で活躍した。

広東省清遠市ヤンカン村と
広州市広東商学院、暨南大学

2003年8月、ヤンカン村ワークキャンプ（FIWC 関西主催）に、初めて広州の学生11名を連れて行くことができた。そして彼らは10月、ヤンカン村でのミニ＝キャンプを自ら企画した。11月にはワークキャンプ団体「朋友工作營」(friends work camp)を設立した。以後、「朋友工作營」のメンバーは、ヤンカン村、呉川市トゥーグワン村、桂林市ピンシャン村のキャンプの準備を手伝ってくれる。

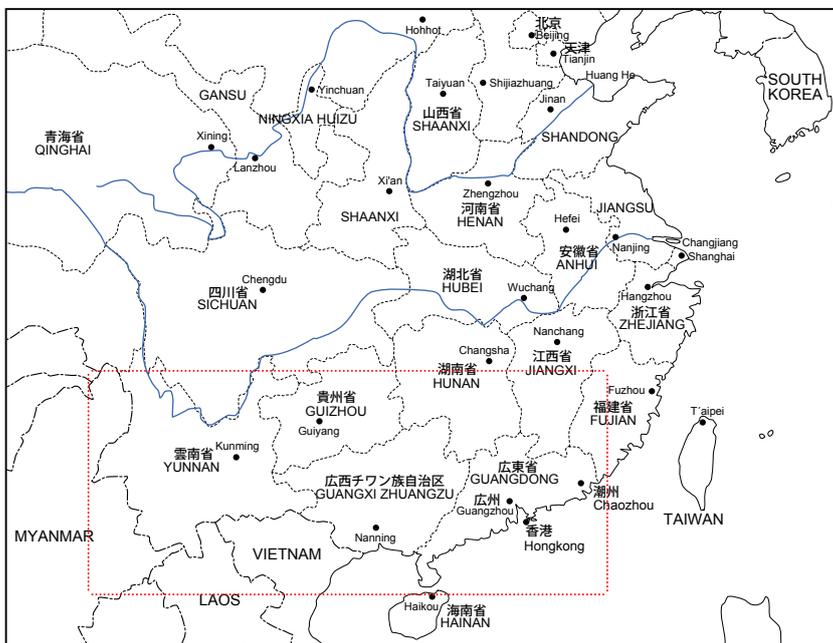


広州の学生@ヤンカン

中国キャンプ史上初の中国の学生キャンパーたち。広州の学生が中心。ヤンカン村の欧鏡剣は言う「15年間は中国の学生がキャンプに来ないと思っていた。考え方を改めたい」

中山大学の学生

早稲田大学ボランティアセンター主催の高州市トンチャオ村ワークキャンプのキャンパー募集を中山大学で行った。ここから2人の学生がキャンプに参加した



広州の学生

広州の学生と酒盛り。左は朋友工作營のリーダーのツイ＝ハン。私の右腕（もしくは私が彼の右腕）。右は次期リーダーと目されるハオイン。彼は雲南省でキャンプをしたがっている

雲南省昆明市ドン村と 昆明医科大学

2003年12月、ドン村の下見に行った。昆明政府衛生局が車を出し、昆明医科大学の学生が同行してくれたので、スムーズにキャンプの準備を進めることができた。2004年8月のキャンプが実現できれば、その参加者は医科大学の学生、「朋友工作營」、韓国「ピースキャンプ」、FIWC 関東のメンバーだけでなく、ニュージーランド、シンガポール、台湾の学生にまで及ぶかもしれない。



雲南省の学生

左から雲南省昆明医科大学のシャオシャオ、ハオボンとドン村の人々。この村には村人の子供がいる。後に立っているのは昆明市衛生局の医者と運転手

広西チワン族自治区桂林市 ピンシャン村と広西医科大学

2003年12月、ピンシャン村キャンプの準備は順調に進む。「朋友工作營」のリーダーと私はアメリカのNGOに申請書を書き、キャンプのための助成金を獲得した。私がキャンパー募集のプレゼンテーションを行った広西医科大学からは、200名の参加応募者があった。

2004年2月キャンプには、「朋友工作營」から4名、広西医科大学から12名が参加した。あるテレビ局はキャンプ中のほとんどの時間を村で過ごし、30分のドキュメンタリーを制作した。



広西医科大学の学生

しょぼい英語での私のプレゼンテーションに付き合ってくれた広西医科大学の100名以上の学生たち



広東省

- リンホウ村 FIWC関東、潮州韓山師範学院「愛心小組」
- トゥーグワン村 FIWC関東、湛江師範学院
- ヤンカン村 FIWC関西、広州「朋友工作營」、暨南大学「Warm touch」
- トンチャオ村 WAVOC (早稲田大学)、中山大学「All Share」
- シーカンジャン村 韓国「ピースキャンプ」、広州「朋友工作營」、暨南大学「Warm Touch」

広西チワン族自治区

- ピンシャン村 FIWC関西、広州「朋友工作營」、広西医科大学

雲南省

- ドン村 広州「朋友工作營」、昆明医科大学 (予定)



韓国ピースキャンプ

韓国ピースキャンプの代表・カン=サンミンさん (左)。現在広州に住んでいる



広西師範大学の学生

カワイイ子が多かった広西師範大学の日本語学科の学生たち。残念ながら2004年2月キャンプには参加しなかった

◎広州 3 大学合同写真展開催

高州市トンチャオ村キャンプ（早大ボランティアセンター主催）に参加した中山大学のボランティア団体「All Share」は、広州 3 大学（中山大学、広東商学院、暨南大学）で 6 月初旬、ワークキャンプ写真展を企画している。この写真展では、多くの学生にハンセン病とキャンプを知ってもらい、同時に今夏のキャンパーを募集する。ここで私はキャンプのプレゼンテーションをする。

◎ハンセン病資料館設立

「愛心小組」と協力し、リンホウ村にハンセン病資料館をつくりたい。村の廃屋を改装して 1960 年代の生活を再現する。また、今年 3 月に建設した集会所にワークキャンプの写真やハンセン病関係の資料などを展示する。

ここは資料館であると同時に、カフェにしたい。音楽をバックに昼はコーヒーや潮州工夫茶を飲み、夜はラムを転がす。学生の週末の溜まり場になれば…。

◎やっと出た芽への水遣り

昨年度に設立した 2 つの学生団体—潮州市「愛心小組」、広州市「朋友工作堂」で定例委員会を開きたい。みんなで集まり、話し合い、そして酒を飲み、活動を深めていきたい。

また、今年 2 月にキャンプに参加した広東省湛江市湛江師範学院、広西チワン族自治区南寧市広西医科大学、桂林市広西師範大学訪問の学生たちにもう一度会いに行き、今後の取り組みについて話し合いたい。

まだ中国の取り組みには芽が出たばかり。ここでしっかりと根付かせたい。

◎中韓日ネットワーク構築会議

—ハンセン病快復村ワークキャンプを通して—

ハンセン病快復村と深い関わりを持つネットワークをつくらう。これが私の夢だ。

現在、中韓日の 11 の団体や大学が、中国の 3 つの省にある 7 つの村でのワークキャンプに独立的に取り組んでいる。2004 年 8 月、村の代表、各団体や大学の代表を広州に集め、会議を開く。横のツナガリをつくり、ネットワーク化していきたい。



中国レポート毎日更新！
<http://www.mognet.org/>



◎ライフワーク

村人と家族とのツナガリを取り戻すこと。これが私のやりたいことだ。

*

昨年 3 月リンホウ村ワークキャンプに、テレビが来た。テレビ局に友人がいる韓山師範学院の先生が呼んだためだ。そのときテレビは、村人の「カンペイちゃん」こと方紹平をインタビューし、後日彼の映像が名前付きで潮州市内全域に流れた。当然、カンペイちゃんの実家近くの人々も見た。

1 年後の今年 3 月、再びテレビがリンホウに来了。カンペイちゃんは出演しなかった。

「去年の 3 月、わしはテレビのインタビューを受けた。村人は立派だったと誉めてくれたが、家族は不名誉なことだと言うんじや」。

カンペイちゃんは年に 2 度ほど、実家に帰る。彼は金歯を見せて高く笑い、続ける、



「故郷の人々はわしが麻風村にいることを知らなかったんじや。今は、誰でも知ってる。帰省してもわしは家でじっとするようになった」。

そう筆談すると彼は大声で短く笑う。

「以前はなあ、帰省するとたくさんの人が気遣ってくれたもんじや」。

書き終わると、彼はゆっくりと顔を上げ、大きく 2、3 度うなずく、微笑をたたえながら。私は背筋にゾワッとするものを感じる。今はどうなのか。

「テレビ以前と比べ、それほど親切ではなくなりました」。

そう書くと彼はダミ声で笑い、手を振り上げながら言う、

「アッハハハハ、わしは恐れんぞ！」

そしてまたペンを取る、

「以前は家に帰ると、敬意と親しみと熱意がこもった、愛があった。今は、ない」。

カンペイちゃんは自ら書いた文字を見つめる。彼が静かに顔を上げると、その眼が赤い、と思うと次の瞬間、顔を机に突っ伏し、声を上げて泣いた。私はドアを閉め、彼を抱きしめて泣いた。

*

村人と家族とのツナガリを薄めてしまった。私は、カンペイちゃんと、リンホウと、ハンセン病に、関わり続ける。